

沖

4
2019

毎月雑誌【お魚】



蝶の昼

能村 研三

平成の後書

三 檜 や 抜 け 道 の 先 任 せ を り

止 め 石 の 結 び 十 字 や 名 残 り 雪

し わ し わ に 湯 葉 茹 で あ が り 春 愁

生 返 事 し て 酢 水 雲 を 食 み て を り

いよいよ平成の終結の月となった。平成が始まった一九八九年は先師登四郎が七八歳、私が三九歳、そして「沖」は創刊から十九年目に差しかかっていた。

先師登四郎の第十一句集「長嘯」は平成元年に始まる句集で

霜掃きし帚しばらくして倒る
の句を巻頭に据えている。

私は処女句集『騎士』を刊行後わずか二年で『海神』を出したので、少しじつくりと俳句を作ろうとした時期でもある。

春の暮老人と逢ふそれが父

平成元年の作で、この句を取めた第三句集『鷹の木』で、私は平成五年に俳人協会新人賞を受賞した。

この頃の先師は齢を積みながらも、俳句を作るのが自由で楽しかったと述べているように、総合誌に自分の年齢の七十七句、八十句を発表、ついには百句を発表するなど精力的に句作を楽しんだ時代であった。妻を亡くした寂しさも徐々に吹っ切れて、登四郎は新たな作句法の手ごたえを得たようである。思いがけぬ発想が湧いたり、旅先で日常身の句が浮

明晰に読み解いてをり涅槃絵図

涅槃雪文の封切る指ナイフ

蝶の昼反古を呑み込むシュレッダー

アトリエの窓より先に北開く

桑解くと放胆すぐに始まりぬ

海の面にそぼ降る雨や雛流す

かんだりすることがあるなど大作の
楽しみと効用があったようだ。

登四郎は平成二年には春の叙勲を
受け、平成の今上天皇に拝謁しお言
葉をいただいた。この年は「沖」が
創刊二十周年を迎え、その記念出版
として『能村登四郎読本』が刊行さ
れた。この出版について登四郎は大
層喜んだようで、これを作ってくれ
た名編集者の鈴木豊一さんに「今度
の本は大変よくまとめてくれた。わ
たしは、これでいつ死んでもよいと
いう気持だ」と述べたぞうだ。

この後平成五年には句集『長嘯』
で詩歌文学館賞を受賞するなど、平
成の十三年間は登四郎晩年の艶、俳
諧無辺、放下の句境と評される時代
であった。

喇叭水仙

森岡 正作

淡海に即かず離れず青き踏む
初音とは母の名前よ初音聴く
冴返る三番線は岬行き
喇叭水仙風に音程任せをり
土管などどこにも無くて春夕焼
春夕焼背後の空が濡れてゐる
丁寧拭いて雛を目覚めさす

わが居間の

わが家には娘が二人いる。妻が早々とお雛様を飾った。床の間と応接間に一人ずつのを毎年交互に飾るのであるが、昨年義母が亡くなったので一つは仏間にした。しかし、もうとうに大人になった娘等は、ケーキぐらい供えたいのに存外無関心である。そのうち、雛の目が過ぎたのであるが、早く片付けないと婚期が遅れると言う伝えがあるという。妻に「早く仕舞ったら」と言いたいと言えない。娘には内心早く嫁いで欲しいと思いつつ、面と向かつては言えない。複雑な心境である。登四郎先生には三人のお孫さんがいて、皆お嬢さんである。わが居間の十日のほどを雛に貸すと詠んでいるが、俳句には厳しい先生が、この十日間はいつも柔和な表情で過ごされたに違いない。わが家と違って、そんな先生のお姿を想像するのは楽しい。

能村登四郎の軌跡〔8〕

能村 研三

プールより出て耳朵大き少年なり

『定本枯野の沖』昭41

私は昭和四十一年には十七歳なので正に少年と言われるに相応しい頃であったが、ここで詠まれた少年のモデルではないようだ。というのもこの頃は確かに泳げるようにはなっていたものの、水中に長い時間潜って耳朵を大きくして上がってくるような少年ではなかった。登四郎は、若い頃から水泳は得意な方で、教員時代は夏休みのプール当番にも駆り出されることが多かった。耳の大きな少年という興味福寺の阿修羅像を思い出す、この句のモチーフとなったのかヘシャワー浴ぶ一切無なる阿修羅ぶり」という句も発表している。

流し雛見えなくなりて子の手取る

『定本野の沖』昭42

登四郎自註には「鳥取からかわいらしい流し雛を送ってもらった。夫婦雛がさん俵の上に乗っていた。」とある。鳥取からと言うから恐らくは牛尾三千夫さんから頂いたものだろう。この頂いた流し雛は私も記憶に残っている。しかし実際は雛を川に流したこともなく、あくまでもフィクションの句で想像力を思い切り働かせた句である。流し雛は災厄を人形に託し穢れ払いをする風習で、流れていく流し雛に人々は手を合わせたという。中七、下五の「見えなくなりて子の手取る」に子どもの健やかな成長を願う祈りの深さがある。



花冷えや老いても着たき紺緋

『定本枯野の沖』昭42

登四郎は仕事から家に帰った時には、着物を着ていることが多かった。幼少の頃に着せられた紺緋を懐かしみつつ、様々な過去を思い出したのであろう。登四郎はこの時五十五歳、教職でも責任ある立場となり、俳句の世界でも俳人協会の幹事になるなどの充実した日々を送っていた。一方で、「老い」ということに意識し始めた頃でもあったが、常に若さだけは失いたくない気持を持ち続けていた。この句はよく色紙や短冊に揮毫する句であったので登四郎本人も気に入った句であったようだ。

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

定本枯野の沖』昭42

この句は登四郎を語るに一番出てくる句で、自註では「春の午後ひっそりとした大学のグラウンドで見た風景」とあるから、自らが勤める学校のグラウンドではないようだ。家の近くにはポプラ並木が綺麗な歯科大学のグラウンドがあったので多分そこで見た景であったのだろう。登四郎は句集を出す度に、これまでの俳句姿勢を問直し続けた人であったが、ひたすらに遠くに投げるためだけの行為を繰り返す孤独な作業は自分そのものであったようだ。この句は教科書にも掲載された句で市川の陸上競技場に句碑が建立されている。

蒼茫集



光の出口 細川洋子

汽笛 宮内とし子

*針穴は光の出口 針供養

寒風や砂の楼閣立つ刹那
たうたうと正論言うて息白し
膝元を明るくしたり水仙花
室咲は夢見る花と思ひけり
立春大吉印泥の練り艶を増す

*霜の夜の汽笛は棒のごとく鳴る

凍滝となりたる水に裏の音
靴のまま上がる洋館冬の薔薇
建具屋の小さき鉋日脚伸ぶ
通されて水仙匂ふ中二階
春なれや浅草までの舟の揺れ

平成越えて 千田 敬

断崖 辻美奈子

仲見世の街騒遠に切山椒

*マンションの壁の断崖日脚伸ぶ

女戦士のおらぶる春のテニスかな
*わが世代ぶらんこならば志村喬
花びら餅同人門出の佳き日には
いま置きし眼鏡をさがす余寒かな
青き踏む昭和平成越えて踏む

大試験へと立つ親の顔は見ず
天鷲絨の夜てふ袋春の月
夢にまだ赤子産みたる春障子
寝て覚めてやりたいことを春休
からつぽの古巣に和毛吹かれをり

鼓動 能美昌二郎

冬北斗海に鼓動のありにけり
初雪や社務所に置かる竹箒
波音は海に還りぬ冬深く
大寒や鋭く立ちし犬の耳
* 垂直に空を拵げて鷹柱
毛糸玉引けば引くほど遠のきぬ

放下 藤原照子

右書きの店の名東山しぐれ
* 放下の他なき鮫鱈の吊られけり
結氷の湖の満月一会とも
鱸酒や欠けしひとりのその後など
熊の皮敷きたる炉辺の寡黙がち
探梅や姉妹の記憶噛みあはず

細濁り 千田百里

スーパームーン仰ぎては散り寒の辻
* 辻に出て右行けば春右へ行く
鬼嫁と呼ぶるわたし福は内
詩もかくあれ混々と春の水
細濁りさささせて芹抜くかをりぬく
春動く栗鼠の尾房のひと振りに

鈍行 荒井千佐代

柳絮飛ぶ川沿ひの家ささくれて
* 裏口の舟より人や雛まつり
笹鳴きや寢墓と呼べど石二つ
葬列と同じ方へと鶴帰る
鈍行の停車の長しうらけし
春日や屋根より路地へ雀降る

潮鳴集



二 月

塙 誠 一 郎

春 障 子

大 矢 恒 彦

*さりげなく来てさりげなく二月去る
呼びかけの続く弔辞や鳥雲に
春を待つポトルシツプは海知らず
綿虫と出会ひ置いてきぼりとなる
花好きの床屋はぐくむ風信子

ひ げ

町 山 公 孝

枕 窪

七 田 文 子

*髭・鬚・髯 満行僧の列や春
みちのくの一樹に春の息吹かな
錆色の艶増す詩碑や春夕焼
深更のページ繰る指寒戻り
春闇や貨物列車のリズミカル

弁当の濃き香浅草初芝居
古書市の混雑にをり雪催
東風吹くや信号音の「とおりやんせ」
ポケットの中にポケット地虫出づ
*春眠のどつぷり大き枕窪

飛鷹選評



能村 研三

紙漉女のの字のの字に水と和す 五十畑悦雄

漉き舟に楮や三椶などの原料繊維と水を入れ、和紙を漉いていく。漉く面に空気を入れないように気をつけながら、漉き簀をそっと上げ下げし、紙を重ねる作業を繰り返す。万遍なく皺が寄らないようにするため、のの字のの字を書くように丁寧に漉き上げている紙漉の女性の姿が見える。

俳人も召され歌会始かな 大網 健治

平成最後の歌会始が行われた。今年には召人には俳人協会名誉会長の鷹羽狩行さんが招かれた。私たち俳人にも歌会始が身近に感じられるうれしい出来事であった。鷹羽狩行さんの一首は〈ひと雨の降りたるのちに風出でて一色に光る並木通りは〉であった。タイムリーな一句である。

雁風呂や同じ向きなる蟹の墓 くどうひろこ

雁が北へ帰ったあと、海岸に落ちていた木片を拾い、それを薪にして焚いた風呂のこと。残された木片は雁が死んだ数であるとして悼む心もある。海での仕事を生業とした蟹たちの墓はみな海が臨めるところに建っている。

初笑どつと我が家の膨らみぬ 永尾 春己

新しい年を迎え家族一同が揃い賑やかな正月となった。昔から「笑う門には福来たる」といつて笑い声はどこか目出度く陽気な気持ちにさせてくれる。笑い声が絶えない家族、今年も良いことがありそうだ。

賀状来ずあの悪筆の筆太の 川高郷之助

私の句に〈春しぐれ悪口も出て人悼む〉があるが、本当に親しい友人であれば、お互いの欠点を知り尽して本音で付きあうことができる。ただし、悪意に満ちたものであつてはいけない。いつもお正月には必ず年賀状の交換を欠かさずしていた、親しい友人からの年賀状が今年はなかった。字は決して上手でなく筆太の字で書いてくるので、すぐにわかるのだが、その一枚が見当たらないことに何か寂しさを感じた。

手から手へ初湯の嬰は発光体 伊藤よし江

新年最初の湯に生まれたばかりの赤ちゃんを入れた。手のひらに乗せられ、つやつやと濡れて輝く桃色の命は家族にとって、まるで発光体のよう。手から手へ渡されていく赤ちゃんは慈しみに包まれ、誕生した者だけが持つ、うっとりとし安心しきつたその表情こそ、なにもものにもかえられない宝なのである。

沖作品



能村研三選

* 賀状来ずあの悪筆の筆太の

初みくじざつと見てより音読す

古コート無頼の性の隠れなし

しばらくは覗かれてをり露の臺

冴返る書棚の隅に借りし本

* 手から手へ初湯の嬰は発光体

春光を集めて九輪天を突き

岬鼻に富士置く安房の初明り

初富士や切子光りの灘越しに

冬の月波引く砂に音のあり

臘梅のいのちの明り安らけし

* 紙漉女のの字のの字に水と和す

切り出しの天然氷透きに透き

冴返る森が吸ひこむ鳥のこゑ

明日受験あふる期待の星明り

埼玉

川高郷之助

千葉

伊藤よし江

栃木

五十畑悦雄

* 俳人も召され歌会始かな

風向きに逃げ回る子やどんどの火

俸からのお下がりにありて春めけり

春待つやジグソーパズル未完成

水温む老いを友としビバルデイ

* 雁風呂や同じ向きなる蟹の墓

義経寺の鰐口曇る余寒かな

真つ向に蝦夷の島影石尊採り

春北風の尖りくる波難破船

岬宮のうすき神燈雪問草

初笑どつと我が家の膨らみぬ

等伯の松の薄墨淑氣満つ

大寒の人人人の前屈み

カーテンに雀の影や春隣

薄氷や光は蒼き影を持ち

東京

大網 健治

青森

くどうひろこ

福岡

永尾 春己